

# I

その歌声、想像以上

ロックンロールって、なんだろう。

頭のなかをぐるぐると駆けめぐっていた。

答えを知るあのひとは、夕暮れを背に本を読んでいた。

すこし開いた窓から風が吹き、制服のスカートを揺らす。運動部のかげ声が響き、静けさを際立たせている。文芸部の部室は狭く、向き合った顔はすぐ近くにあった。

やがてあのひとは視線に気づくと、

「これ、どうしたの」

頬に触れて、優しく撫でてくれる。

「ホウキで」

「うん」

「叩かれました」

正直に告げると指が、耳の裏をなぞった。

「痛む？」

「あまり」

首を振ると、手のひらはゆっくりと離れていった。

からだの硬直が解け、じんとしびれを残す。目を背けて窓を見ると、真っ赤な夕暮れが雲の隙間で輝いていた。

「またされたら、すぐに相談して」

あのひとはそう言うのと、わたしの頭を撫でた。

心地よくて目を閉じると、まぶたにイメージが浮かんだ。暗闇はクラスメイトの男子に姿を変え、ホウキを手になにやと笑っている。彼は「ロックンロール」叫んでわたしの頬をぶった。無視するともう一度、今度は頭を叩いた。やがて彼は殴り飽きたのか顔をしかめ「ロボットみてえ」吐き捨てて消えていった。

「あの」

わたしは目を開くと、髪を撫でる手にすがりついた。

「ロックンロールって、なんですか？」

言葉にすると、ぎゅっと胸が苦しくなった。

それでもわたしは腕を掴み、あのひとを見つめた。

「難しい言葉だね」

「はい」

「いろんな意味があるし」

「そうなんですか」

あのひとはそれ以上なにも語らず、顔を近づけてきた。

わたしは導かれるように、再び目を閉じた。濡れた唇の感触が漂う。吐息と吐息がぶつかり、甘い匂いがする。脳みそが熱くしびれ、背筋がしなる。舌のうえにしのびこんでくる激しい悪寒に溺れると、すべてが真っ白に染まった。

イメージが果てるなか、疑問だけが残る——ロックンロールって、なんだろう。

答えるものは、もう誰もいなかった。

まぶたを開けると、冷房の効いた部屋にひとり取り残されていた。寝転んだベッドの隅で、スマートフォンがアラームを鳴らしている。わたしは身を起こし、いそいそとクローゼットを開いた。

時間ぎりぎりに飛び乗った地下鉄は、梅雨の湿った匂いがした。

空調は効いていない。肌にとわりつく汗が気持ち悪い。座席の端っこに腰かけると、バッグからハンカチと本を取り出した。額の汗をぬぐい呼吸を整えると、手にした文庫本を開く。

森見登美彦の小説《夜は短し歩けよ乙女》お気に入りの一冊だ。

とくに第一章が印象的。好きなお酒だけが飲みたいと夜の街をさまよう黒髪の乙女が、数々の出会いを重ね幻の名酒《偽電気ブラン》をいただく——という物語がつづられている。

わたしはこの物語に出てくる、黒髪の乙女が好きだった。

彼女のようになりたいたときえ思っていた。夜の街をひとりで歩くなんて憧れる。それに彼女は人生論を受け止める広い心も、罪を許す優しさも持ち合わせていた。わたしとは似ても似つかない。

度胸がないわたしは、いまでも視線を気にして地下鉄の車内を眺めている。

視線の先で、担い手のいないつり革が揺れていた。駅に着くたび雨あがりの気配が吹き込み、首もとがべたつく。窓を見ると仏頂面が映り込んで、こちらをじっと見つめていた。隣に若い男のひとが座ると、車内はさらに居心地が悪くなる。彼はイヤホンをはめ、激しい音楽を聴いていた。無視して小説に目を向けても、ギターのキンキン声が神経を逆立てる。

ロックンロールだ。わたしは顔をしかめた。

肩が擦れ合って他人の臭いがすると、六月のぬるい空気を恨んだ。

顔を背けても効果はなく、本を握りしめてやり過ごした。文字を辿ることをあきらめると、わたしは妄想に逃げ込むことにする——目を閉じてイメージを描いていくと、すぐに情景は浮かびあがった。規則正しい音も地下鉄の臭いもわずらわしい音漏れも、なにもかも気にならなくなっていった。

気づけばわたしは、制服を着て夕暮れの部室にいた。

窓から夕陽が差し込んでいる。

向かいにはあのひとがいて、難しそうな本を読んでいる。

わたしは思い出のページを次々とめくっていった。

『——次は新栄、新栄です。お出口は左側です』

目的地に着くまで、そうやって妄想にひたっていた。

地下鉄をおりると、本のかわりにスマートフォンを取り出す。

もちろん、誰からも連絡はない。迷惑メールの通知が三件、ホーム画面に踊っている。ふと不安になって着信履歴を見ると、そこには数時間前のやり取りがちやんと表示されていた。それは数カ月ぶりにひとと話したという誇らしい記録だった。

改札を通過して立ち止まると、電話の内容を思い出す。

最初は宗教勧誘の電話かと思った。

確認せず通話ボタンを押し、しまったと思ったときには遅かった。

「あの。相川渚さんの携帯ですか？」

「———ですが」

「覚えてる？ 高校で同じクラスだった」

「矢ヶ崎さん」

「正解！」

電話はそんなやり取りからはじまった。

声の主は、矢ヶ崎稀。見知った名前なので覚えていた。

彼女は絵に描いたようなネアカで、カースト概念はうえのほう。文化祭のときに電話番号を教えてもらってから、とくに話したことはない。クラスも一年しかかぶらず、廊下ですれ違う程度の仲だった。

けれど彼女は、わたしの電話帳のなかでずっと輝いていた。家族ふくめて五件しか登録されていないので、親近感がわくのも当然だった。

「久しぶり、元気してた？」

「はい」

「そっか、いまって大丈夫？ あのさ、お願いがあるんだけど」

矢ヶ崎さんは薄い関わりをものともしなかった。うれしいけれど、すこし不安だった。お願いってなんだろう。わくわくすると同時に、不安もあった。テレビでよく見る宗教勧誘だったらどうしよう。

「なんでしようか」

内心、おどおどとしながら声をあげた。



矢ヶ崎さんは「あ、待って。安心して」と前置きすると、

「今日、もし空いてたらライブ行かない？」

なんとわたしを、遊びに誘ってくれたのだ。

ライブ——そのきらきらした言葉に気が遠くなった。喉を詰まらせている間に、矢ヶ崎さんは事情をゆっくりと説明しはじめた。どうやら行く予定だったひとが来られず、チケットがあまっているらしい。

「どうしてわたしなんですか」

「仕事辞めたって聞いて、暇かなと思って」

なぜそれを。思わず問い返そうと唇を開くも、声は出なかった。

事情を知られて「せっかくですが」と断るのも疲れてしまう。どうしよう、どうしよう。言葉を探している間に、矢ヶ崎さんは話をまとめていた。

「じゃあ新栄駅の改札、十七時ってことで」

こうしてわたしは、よくわからないライブに行くことになってしまったのだ。

ぼんやりスマホを見つめていると、時計が待ち合わせ時間を示す。駅の構内を見わたすと憂鬱な気分になって、しぜんと吐息があふれた。

あのひと以外と遊ぶなんて初めてだった。

果たしてうまく話せるのか、とても心配だった。「相川さんってさ、ロボットみたいだよね」そんな陰口を思い出していると、

「あっ相川渚ついていた!」

突然、フルネームで呼ばれる。わたしは驚いて背筋を震わせた。

顔をあげると、そこには矢ヶ崎さんの姿がある。高校のときから、さほど変わっていない。紺色のTシャツにジーンズという出で立ちはラフで、明るいオレンジの髪も一つにまとめている。服装に気を遣わないタイプなのだろうか。

すこしほっとするも、

「ていうか、なにその格好。ライブだよ?」

ため息をつく彼女の言葉に、固まってしまった。

急いで自らの服装を見直してみる——アースカラーの刺しゅう入りワンピース（お気に入り）にTストラップサンダル。とくに問題は見あたらず、首をかしげる。「ライブ初めてだったんだ。言っつてよ」

「ごめんなさい」

頭をさげると、矢ヶ崎さんはそれ以上わたしを怒らなかつた。

「いいけど。ほんと久しぶりだよね、七年？　八年？」

「どうでしょう」

彼女はわたしを、楽しそうに迎えてくれた。

戸惑いを隠せず、視線をどこに向けていいか迷った。結局、わたしは導かれるままに新栄の街並みを観察するなどして、お茶を濁しはじめている。

駅からすこし歩き、わたしたちは古いレンガ色のビル前に並んでいた。見わたすと細長い街路に沿って、真っ黒な芋虫状の列が続いている。黒。黒。黒——みんな黒づくめ。まるで宗教団体か抗議デモみたいだ。失礼なことを思いながら、わたしは場違いなワンピースを恥じる。やけに視線を感じ、咎められている気分だった。

「ねえ。いつ、仕事辞めたの？」

「——四月末に」

「就職組だったよね。覚えてる。なんだっけ仕事」

「ただの事務です」

「ふうん、縁遠い世界」

「矢ヶ崎さんは、お仕事は？」

にっこり笑う矢ヶ崎さんに、期待をにじませて問いかけた。

無職だったら気が合うかもしれないなんて、馬鹿なことを思う。ぼんやり眺めていると、矢ヶ崎さんは唇に手を当てた。

「内緒」

「そうですか」

「うん、でもさ。ほんと来てくれてありがとね」

矢ヶ崎さんは答えのかわりに、わたしの手を包んでくれる。

「どうやら、悪いひとではなさそうだ。ほっとすると、肩の力が抜けていった。」

「——ではこれから入場を開始します！ チケットとドリンク代五百円を、必ずお手元にご用意ください！ 整理番号一番から順番に。順番にお願いします！」

列の先で男のひとが叫ぶ。

「行こう。あたしたち、一番だから！」

「列の意味は？」

「とくにないよ。勝手に並んでただけ」

矢ヶ崎さんはわたしの腕を引っ張ると、ずんずんと先に進んでいく。

真っ赤な看板を潜り抜けると、地下へと続く階段があった。ステッカーやポスターがべたべたと貼られた異次元空間。

きよろきよろと四方を眺めながら、奥へ進んでいく。

「今日のバンドの曲、聴いた？」

「——聴いてません」

「だよねえ、そんな気がしてた」

「ごめんなさい」

矢ヶ崎さんはチケットをカウンターに提出すると、

「キマイラ」

簡単な呪文を唱えた。

きつと合言葉なのだろう。

わたしも真似をしてチケットを差し出す。

「お目当ては？」

「キマイラ」

正解。チケットにはスタンプが押された。

用意していた五百円玉は、へんてこなラミネートカードと交換された。

しげしげとそれを見つめていると、

「この券で、ドリンクを注文できるの。ワンドリンク制」

矢ヶ崎さんが丁寧に教えてくれる。

彼女は唇を曲げると、大きな扉に手をかけた。

「ライブハウスへようこそ」

みしつと音を立て、黒い扉が開かれた。

わたしはゆっくりと、薄暗い空間に足を踏み入れていった。

まず目に飛び込んできたのは、黄色い張り紙だった。『モツシュ・ダイクは禁止！』よくわからない呪文が書かれている。続いて空間が思ったよりも広いことに驚いた。空調がばっちり効いていて、とても涼しい。わずかに生臭くて、わたしは口元を押さえる。見あげるとミラーボールがあり、きらきらと輝いていた。

正面にあるステージは薄暗く、闇のなか複数の楽器が鎮座している。

楽器は大きなスピーカーに囲まれて、いまにも音が聴こえてきそうさ。

ぼんやりと立ち止まっていると、肩を叩かれる。

「飲みもの、取ってきてあげよっか。お酒でいいよね？」

「お酒は」

「飲めるでしょー。テンションあげてこ」

矢ヶ崎さんは返答も待たず、さっさと歩いていってしまった。

小さくため息をついていると、今度は背中が押された。出入り口を見ると、真っ黒い集団が扉から次々と溢れ出していた。ずんずんと最前列まで押し込まれ、矢ヶ崎さんの姿が、見えなくなってしまう。仕方なく最前列にあった鉄柵に腕をのせると、わたしはステージを眺めていた。

「あ、いたいた。はいこれ」

「これは、なんですか？」

「ジントニック」

「きらきらします」

「照明のせいかな」

矢ヶ崎さんからもらったお酒は、よどんだ空気のなか青色に輝いていた。

わたしは落ち着かない気持ちになり、それを一気に飲み干した。しゅわしゅわと炭酸が喉をくすぐり、苦いレモン味が口のなかに広がる。

「いい飲みっぷり」

「矢ヶ崎さんも」

「マレでいいよ。みんなそう呼ぶから」

「そうですか」

「渚も、ナギって呼んでいい？」

「いいですよ」

そんなやり取りをくり返すうち、わたしはすっかり矢ヶ崎さん——マレのことを気に入っていた。強引な性格が気持ちいい。空気が読めず無言になってしまうわたしにとって、自分から明るく話してくれるひとは、とてもありがたい。腹黒い友情の芽生えをよそに、いまも彼女は満面の笑みを浮かべている。

「ねえ、もうすぐはじまるよ」

「そうですか」

「気に入るバンドがいるといいね」



マレの言葉にこくりと頷くと、ステージを見つめた。

だんだん空気が変わっていくのがわかった。ぴりっとしていて、緊張する。なのに、どこかふわふわとしていた。

きつとすきつ腹に飲んだジントニックのせいだ。脳に悪さをしている。世界が異次元になって暗転する。そしてスピーカーから曲が流れはじめた。戸惑って周囲を見わたしていると、ステージに続々と人影が現れる。

はじまるのかな。

暗闇を覗き込んだ瞬間。

わたしは、耳が取れてしまったと思った。

爆音。地下鉄の音漏れとは、くらべものにならない。鼓膜のうえで音楽が暴れていた。演奏らしきものはまるでジェットコースターのように素早く回り、赤・青・黄・緑——次々にライトを点灯させていた。眩しくて顔を背けると、観客は平気なのか踊るように手をあげている。わたしは身をすくめ、鉄柵を握りしめた。

また、ロックンロールだ。

今日はずっと、その言葉について考えている気がした。

いま目を閉じれば、妄想のクラスメイトに「ロックンロール」と言って殴られるのだろうか。目を開けていても、こうして音楽に殴られているのに。胃の奥にもやもやがせりあがって、口元を押さえる。悪酔いしたのかもしれない。震える世界のなかで、ステージに立つひとの声が聞こえた。

「これから三十分、皆さんの時間をください！」

三十分。これが？ 気が遠くなってマレを覗き込む。彼女は楽しそうに笑って手を叩いていた。わたしは仕方なくマレの動きに合わせて、ふらふらとからだを揺すってみる。見よう見まねで動き回って、遅れて手をあげた。そうしていると、時間の進みは思ったよりも早かった。部屋が明るくなるたび、マレが楽しそうに話しかけてくれたからだ。

「あのバンドは大阪発なんだけど、名古屋にもよく来るの」

「大阪なのに、ですか？」

「そういうバンド多いよ。ねえ、ボーカルがすてきだと思わない？」

「どうでしょう」

「来月また名古屋に来るから、チケット取ろっか？」

「どう、でしょう」

「ナギったらさっきから、そればかり」

くすくすと笑うマレを見つめながら、わたしはこっさりため息をついた。

二組終わった時点で、もう疲れ果てていた。耳がキーンとなってめまいがするし、サンダルのストラップが足に食い込んで痛い。それに手拍子は合わないし、手をあげるタイミングもわからない。

わたしはライブが怖くなり、心のなかで震えていた。

「ねえ、次のバンドがあたしの本命」

「本命」

「うん。次のバンドで、今日のライブは終わりかな」

「四組出るのでは」

「そうなんだけど。でもなんとなくそう思う」

マレは天井を見あげ、かたく唇を結んだ。

目の前で黒い影がなにやら準備をはじめ、観客はざわざわとしている。わたしは会話を続けようと言葉を探したけれど、それはすぐに難しくなってしまった。

急にひとの波が。

気づけばぎゅうぎゅうに押し潰されて、鉄柵におなかをぶつけていた。

なにが起こったのだろう。黒いTシャツのひとびとが盛りあがりはじめている。照明が暗くなり、闇のなかステージに、のそりと。うごめくものが現れる。会場は異様な熱気にざわついた。遠くでひとの叫び声がする。背中に知らないひとのおなか貼りつく。わたしは両腕で、なんとか姿勢をキープしていた。そういうえば、マレは——横目で見やると、彼女は無事だった。同じような格好でステージを見ている。壇上の影を、じつとにらみつけている。

突然、パツと小さな照明が光った。

わたしはうつむいて観客席に伸びる影を眺める。はじまった——また暴力的な演奏にさらされ、見よう見まねで踊るのだ。わたしはなにをしているのだろう。急にみじめな気持ちになり、唇を噛む。一、二、三……心の準備をして襲いかかる音楽に対抗する。

けれどいつまで経っても爆音はおとずれない。

ギターもベースもドラムも、沈黙を守り続けている。

わたしは瞬いて、ゆっくり顔をあげた。

楽器を携えた三体の影が、きれいに並んでいた。

異様な空気のなか、中央の影が歩み出る。照明ははまだ一つ。豆電球のように小さな黄色い光が、ステージに注がれていた。影のかたちは、顔はどこるか服装さえわからない。周囲を見わたすと、誰もが影を見ていた。そして、わたしもまたひきつけられるようにそれを見た。

小さく、語りかけるような声が出た。

「オマエらを——笑いながら殴ったヤツなんかには届かなくてもいい」

ささやきながら影は、ギターを竖琴のように美しく鳴らした。

「アタシに似ているヤツに、伝わればいい」

同じ時代を生きるものに、伝わればいい」

その声は輝く照明とともに、空間にじわりと伸びていった。目にも止まらぬ速さで、影は複雑な音を鳴らしはじめた。ドラムが地鳴りを生み出し、ベースのうなりがまとわりついていく。それらは細い糸となり、わたしの意識を縛りつけた。やがて、歌声が響きわたる。

すべての歯車が、噛み合って動き出す。楽器から叩き出された音のうえで、詩が意味をなして踊っていた。それは正確に伝わり、視界に文字を刻みはじめ。「終わらないものはない」影は喉を震わせる。「その痛みもいつか終わりを迎える」影はギターを殴りつけ、スタンドマイクを引っ掴んで叫び出す。ベースとドラムが追走するように激しさを増し、やがて圧縮。後奏は鼓膜を殴りつけて弾け飛ぶ。

静寂が散る。

空白に、拍手はない。

終わった演奏の熱が、いつまでも耳を揺らしていた。吐息、汗、そして、すすり泣く誰かの声。ライブハウスの空気が音を帯び、鮮やかに隙間を埋めている。やがて影は唇を開くと、観客に向かって語りかけた。

「なあ、生きる意味ってなんだよ」

感情の波が、ステージから溢れ出す。

「意味って、なんだよ。オマエらさ。生きる意味がなくなった。伝える意味ってなんだ。存在する意味があるはず。そんなことばっか言うけど。意味なんて、ねえよ。最初からそんなもん、ねえよ。それでもアタシたちは——意味なんてなくても」

影が楽器を持ちあげ、弦を殴りつける。

「意味なんてなくても！」

影は叫ぶ。突然ステージの照明が咲き乱れる。

「意味なんてなくても！」

影は叫ぶ。ボルテージは、徐々に跳ねあがっていった。

「意味なんてなくても！ 今日ここに音楽聴きにきてさ。意味なんてなくても、今日までオマエら、生きてきたじゃねえか。歌うことに、音楽を聴くことに、意味なんて、なくても！」

言葉はスモークのなか、啓示のように彩られていた。

「意味なんてなくても！ アタシだってわかってんだ。ゲラゲラ笑いながら殴られたアタシの歌を！ オマエらが聴いてくれて。返せるなら返してえんだ。でも、なにも。なにも返せねえんだよ。だからアタシは——意味なんてなくても！」

言葉を合図に、ギターの金切り声が尖った。ドラムが衝撃を振り回す。ベースが音の隙間をつないで、音楽が完成しはじめ。 「意味なんてなくても！」 絶叫とともに震える音楽は時間を止め、照明のすべてが落ちる。

そして光が。

また、一つの頼りない光が影を映した。

歌が空気を揺るがす。世界が描かれていく。存在しないはずの風が、頬を撫でてきらめいた。空気の一粒さえ、逆立って震えていた。わたしは呼吸を詰まらせ、吐息を凍らせていた。この歌はいけない——耳をふさぐこともできず、歌詞は意味を描きはじめた。

ぼつり、ぼつりと、視界がにじんでいく。

わたしの過去が、照明の作り出した陰影のなか映っている。

目を閉じていないのに、そこらかしこに教室の姿が浮かびあがった。クラスメイ  
トがわたしの頭に給食のスープを浴びせている。頭を踏みつけ、ホウキがうなりを  
あげて頬を殴った。『ロックンロール』影の語る言葉とわたしの過去が、重なって  
響き合っていた。

それ以上、思い出してはいけない。

ぎゅっと目をつむると、わたしは青春のイメージがよみがえらせた。

走る。妄想のなか制服を着て、文芸部の部室へ向かう。



学校のあらゆるスピーカーから音楽が鳴り響いている。廊下ですれ違った真っ黒な集団は、手をあげてぐすぐすと泣いていた。急いで部室の戸を開け、夕暮れのかへ逃げ込む——あのひとの姿を鮮明に描くと、手を伸ばす。

彼女は微笑みを浮かべ、両腕を広げていた。

わたしはその優しい腕に抱かれ、歌声を葬ろうとした。

でも、

無駄だった。

音楽は消えない。

目を閉じてもすり抜ける。

あのひとの姿を碎き、まぶたの隙間に炎を灯す。

思い出したくない記憶のすべてが、頬を伝って流れ落ちる。こんなことは初めてだった。わたしは自らの妄想に飲み込まれ、深い涙の底へ沈んでいった。

「——ねえ。大丈夫？」

肩を揺すられても、しばらく顔をふせていた。

いつの間にか座り込んでいたようで、お尻が冷たかった。

「大丈夫、です」

なんとか言葉を返すと、涙を擦る。

ライブハウスは、いつの間にか明るくなっていった。歪んだ視界のなか、ステージは閑散としていた。パンク寸前の鼓膜が、ささやき合う声を拾っている。あたりを見わたすと、息が止まりそうになった。

観客席は、涙に暮れていた。立ちつくす観客は顔を覆っていた。足元を見ると、黒装束の女の子が崩れ落ちていた。後ろのほうでは、黒い集団が泣きながら背を叩き合っていた。さらに奥には謎の行列ができ、出入り口はふさがっている。扉は開き、蛍光灯の明かりが見えた。もう、ライブは終わってしまったのだろうか。

マレを見ると、彼女はあきらめのにじむ顔でゆっくりと目をふせた。

「四組目は、ちょっといろいろあつて」

「そうですか」

「うん、それより平気？ だいぶ泣いてたみたいだけど」

「大丈夫です」

「感動しちゃうよね。無理ないよ」

「かん、どう」

眩いて首をかしげた。

人前で泣くなんて久しぶりだった。中学生の頃は、よく泣かされていた。からかわれて笑われて無視されて、教室の机にすがりついていた。いま流した涙は、それとはすこし違う。感動、そうなのだろうか。どこか腑に落ちない。

「ねえ、ナギ。ちょっと付き合ってくれる？」

ざわつく気持ちを抱えていると、マレが腕を掴んで言った。

手を引かれるまま、人ごみをかき分けて進む。ライブハウスを抜け出すと、外はもうすっかり暗くなっていた。

「どこへ行くんですか」

わたしがたずねると、マレは強く腕を引っ張った。

「カラオケ。ちよつとでいいから」

「あの。わたし」

「ちよつとだけ、ね？」

マレの顔に笑顔はなかった。わたしはあきらめて、導かれるまま歩く。大通りを一つ入ると、細長いビルが見えた。ギトギトした看板がいがわしい。本当にカラオケなのだろうか。引っ張られてお店に入ると、マレはすぐに受付と話しはじめてしまった。

変わったかたちをしているけれど、ここは有名なカラオケのチェーン店のようだ。入り口の椅子を見ると、真っ黒い集団が座り込んで話している。《キマイラ》と印字された黒いTシャツを着ている彼らは、きつとあの影のファンなのだろう。ようやくそのことに気づくと、ちらりと顔を見られた。わたしは視線をそらす。

ワンピースは汗まみれ。髪は乱れていた。泣いてしまったから化粧だってボロボロに違いない。こんな状態でカラオケなんて、マレはなにを考えているのだろう。

彼女の後ろ姿をにらむと、小さく吐息をついた。

化粧室に立ち寄って部屋に入ると、マレはリモコンを掴んで選曲をはじめた。

わたしはタイミングをうかがって唇を開く。

気になっていることがあったのだ。

「どうして」

「ん？」

「わたしを誘ったんですか」

「ライブのこと？」

「両方、です」

「理由なんて——もちろん、あるんだけど」

マレはいたずらっぽく笑ってわたしをにらむと、リモコンを差し出した。曲はまだ入っていない。壁際のディスプレイはよくわからない情報番組を流し続けている。受け取らないことで拒否の意を表明すると、マレはリモコンを押しつけようとした。からだが近づく。彼女の汗の匂いが、鼻先を漂う。頬を熱くするわたしに気づかず、マレは顔を覗き込んできた。輝く唇が近づき、慌てて目をそらす。

追いかけてくる視線に『見ないで』と念じ、腰を引こうとした。  
マレの吐息が、頬をかすめていく。

「ナギってさ」

「——はい」

「歌うまかったよね？」

「うまくないです」

「音楽の授業とか合唱祭のとき、気になってたのを思い出したの」

「でも、うまくないです」

マレは強引にリモコンを押しつけ、わたしの肩を掴んだ。

「最近、夢を見たの。誰もいない教室であなたが歌ってた。馬鹿みたいな話かもしれないけど、どうしても歌が聴きたくなった。それで誘ったの」

「ライブは」

「たまたま。でも、見せてよかったと思ってる」

マレは視線を弱めると、手を離して隣に座った。肩が擦れ合っぴくりとする。わたしは息をつき、横目で彼女を見る。どうやら選曲を待っているようだ。

「あの」

わたしが声をあげると、彼女はにっこりと微笑んだ。そのとき、わたしは『求められている』唐突に、そう思った。ぞくりとからだの芯が震える。吐息に熱がこもり、唾を飲み込む。気づくとわたしは、惹かれるまま唇を開いていた。

「なんでも、いいですか」

「なんでもいいよ」

言われてリモコンを覗き込む。

見覚えのある画面が表示され、指先を誘っていた。

そうだ。よく考えれば、別に歌うのが嫌なわけではない……と思う。ロックンロールはよく知らないけれど、求められているなら、別に歌えばいいのではないか。恥をかいたとしても「ほら、やっぱり」と知らぬ顔をすればいい——わたしは少し迷って、遠い昔に聴いたことのある歌を一つ選択する。

立ちあがると手を伸ばし、黒いマイクを掴んだ。

ディスプレイが素早く切り替わる。

タイトルが安っぽい字で、

《丸ノ内サデイスティック》と表示される。

カラオケの音源は、どこか薄っぺらに聴こえた。空虚でもの悲しく感じた。そんなことを考えるのは失礼かもしれないけれど——ステージのうえで素晴らしい演奏とともに歌えたら、きっとすてきなのだろうと思った。

前奏が終わりテロップが流れる。必要ない。

息を吸い込んで目を閉じる。

スイッチを入れ、すべてを遮断。

まぶたの奥に、じわりとイメージが浮かぶ。

わたしは映し出された夜景に、トリップをはじめた。



夜景をズームすると、猥雑な街が映し出される。

わたしは架空の街路に立っていた。マイク片手に歌いながら、濁った商店街を眺める。リッケンって、なんだろう。あてずっぽうで描いたピザ屋が見えてくる。お金はなくて、リッケンとやらは買えない。かわりに声で電話を鳴らすと、店を出て先へ進んだ。そのまま歩くと、四月まで勤めていた会社が見えてくる。

退屈な毎日の象徴だ。陰口とののしり。終電で帰っては涙に溺れため息。そうだ。わたしはそうやって生きてきた。

まるでこの歌のように。

安アパートの寝具で、遊戯するだけ。

馬鹿で明るい女になれたらいいのに。わたしはそんな性格ではない。ましてや椎名林檎になんてなれない。国境は越えられず、仕事はいつの間にか辞めていた。警官ごっこをする勇氣もなく、いまは貯金をすり減らしている。

空っぽの音楽を背に、声を張りあげている。

早く終わらせて終電で帰りたい。

でも、帰ってどうするの？

気づけば妄想の果て、自宅のベッドでワンピースを脱ぎ捨てていた。指先で絶頂をたぐり寄せると、汗の香りがする。向日葵のようなマレの笑顔が浮かび、心が揺れる。いつもは、あのひとなのに——今日は、どこか様子がおかしい。視線を感じて振り向くと、部屋の隅に影があった。わたしは間奏と同化し、その言葉を聞いた。『意味なんてなくても！』

影は突然、魔物の姿になった。部屋を突き破って叫ぶ。その姿はギリシア神話のキマイラか。それとも単なる人影か。わからない。視界が黒で塗りつぶされていた。こぼれ落ちた涙に流され、わたしは海の底へ沈んでしまう。

『意味なんてなくても！』

ザーザーと奔るノイズのうえて肥大化した影がわめいている。わたしの歌を邪魔して、つらい記憶を描き出す。教室でわたしはひとりだった。社会に出ても変わらなかった。誰もがわたしを笑い、最後に言った。「ロボットみたい」

『意味なんてなくても！』

なのにマレは笑ってくれた。でもそれは打算だった。彼女がわたしを求める理由、それはなんだろう。ロックンロールと関係があるのだろうか。この声もまた、あの頬を殴るホウキと同じロックンロールの一つなのだろうか？

『意味なんてなくても！』

だとしたら——わたしは反響する声を押し潰した。歌う。喉を震わせ、耳の奥を揺らす。心臓を燃やすと、心をえぐる影の輪郭が見えてくる。涙の手触りを感じて、感動ではないと知る。わたしと影は同じ過去を抱え、決定的に異なっていたのだ。

『意味なんてなくても！』

意味がないなんて、わたしは嫌だった。

意味がなくては悲しすぎる。

誰も報われない。

二十五年間生きた意味が『ない』なんて。

そんなの、認めたくないよ。

感情を震わせ、わたしは喉を引き絞って叫んだ。

最後のフレーズを伸ばすと、心のなかで影が崩れはじめた。

砕け散った残骸は、闇の果てに吸い込まれていく。安アパートも猥雑な街も知らない名前も、自宅のベッドも教室も会社も、すべて飲み込まれて消えていく。それはわたしの怒りさえ奪い去り、まだなにかを求めているようだ。あのひとの記憶さえ、消し去ろうとしている。

お願い。

いまは消えて。

念じると妄想はほどけていった。

目を開くと、吐息が荒かった。

しばらく呆然として、ゆっくりとマレを見やった。彼女はうつむいてリモコンをまさぐっている。無言のときに流れ、気まづさに身じろぎをする。おそらく、感情を込めすぎてしまったのだろう。恥ずかしくて、椅子に座ると身を縮める。

なにも言わずリモコンを操作していたマレは、ふと興味を失ったようにバッグをまさぐりはじめた。一枚のCDを取り出し、わたしに差し出してくる。

「あの、これは」

「最初に聞いたよね」

「えっと」

「これがあたしの仕事」

意味深に笑われ、CDを注意深く眺めた。

ジャケットの写真のなかに、大きなベースを持つマレが映っていた。

「バンドを、やっていたんですね」

「音楽は十年。このバンドは二年やってる」

「そうなんですか」

「これさ。聴いてくれないかな？」

頷くと、マレはほっとしたように吐息を漏らした。

結局、わたしたちはそのあと歌わなかった。マレの「用事がある」という一言で、カラオケはすぐにお開きとなってしまった。

「今日はありがと。またね」

彼女はあっさりと手を振って、足早に街のほうへ歩いていった。じっと背を見つめてみると、彼女はすぐに電話をしはじめた。楽しそうに話している相手は恋人、だろうか——ふと思った瞬間、わたしは恥ずかしくなった。久しぶりにひとと会っただけで『求められている』だなんて、馬鹿みたい。バッグに入らず持ったままのCDを眺め、ため息をついた。

よく見るとCDは新品ではないようで、袋が破れている。なにかが挟まってケースが浮いていた。開けると、紙切れが一枚入っている。

なんだろう。

わたしは描かれた文字を覗き込み、呼吸を止めた。

『次はこれを歌って！』

誰かへのメモ書きだろうか。それともわたしへのメッセージ、とか。

まさか。そんなのあり得ない。首を振ってCDケースを閉じる。でも言葉はいつまでも頭のなかを、ぐるぐると駆けめぐっていた。

ロックンロール——それを歌えば、わたしは求められる。マレの向日葵のような笑顔にも。意味なんてなくてもと歌った、あの黒い影にも。そんな気がして、胸にCDを抱きしめた。心臓がどくどくと高鳴っていた。